

*保健室の先生

俺がシャワーを浴び終わると、俺を運んだ生徒はいなかった。

「あの、先生。俺の制服が見当たらないんですけど」

「ああ、あのグチョグチョに汚れたヤツ？学校のコインランドリーに入れて、今洗濯中だから、代わりにそれを着てね」

先生が指さした方を見ると、折りたたまれた服があった。広げてみると、ゆったりとしたワンピースのようなもので、着てみるとブカブカだった。先生はこちらを見ないで、何かを書いていた。

「これ病院で健康診断の時に着る服ですよね…？」

「それしか無かったので」

「でも、これ下着は…？」

「無いですね。残念ですが、そのまま過ごして下さい。といっても、今君がその恰好で教室に戻るのは大変危険ですので、服が乾くまでの間、保健室で過ごして下さい」

先生はそこで初めてこちらへ顔をあげた。キイトコマのついた椅子にもたれかかると、こちらを見て、目をぱちくりさせた。

「……少々マズいですね」

「えっ」

先生は目を細めると、こめかみに指を置いた。

「っ♡先生…♡」

「んっ…はぁ♡良い匂いです♡シャワー浴びても、あなたから香る強いフェロモンの匂いが、私を狂わせます…♡ほら、こっちももうこんな風になってる♡」

先生は固くなった股間を俺の股間に押し付けた。ゴリッとしたものが当たって、俺は「ひうっ♡」と声をあげてしまう。

「可愛いですね♡はぁはぁ♡もう我慢できません…♡」

先生は俺の唇にキスを落とした。キスはどんどん深くなり、先生の舌がにゆるりと侵入してきた。俺は先生に後頭部を抑えつけられて、グイグイ入ってくる舌に、息も絶え絶えになった。

「これはお尻から入れるタイプの媚薬なんです♡はあ♡はあ♡私は今すぐにでも、あなたを犯したいんですが、あなたにもその気になってもらわないといけな
いのでえ…♡はあはあ…♡さすがに無理やり犯すのは
良くないですから♡あなたがせっかくヤル気になって
くれているなら、今のうちに使っておきます♡これ
で、あなたには最後まで付き合ってください…♡ふふ
っ♡ふふふっ♡♡♡」

先生はとてもいい笑顔で、座薬を俺に見せつけてきた。先生の怖いような迫力のある笑顔に、俺はビクリッとした。慌ててベッドの端に逃げるも、先生がそれを許さない。先生は俺を壁際まで追い詰めると、逃げられない様に俺を腕の中に閉じ込めた。ベッドがギシッと大きく軋む。

「せ、先生…？」

先生は俺の背中にまたがると、俺の両腕を縄で縛り始めた。

「ッ！？」

「抵抗されると面倒ですから。……私、前々からあなたに興味があったんですよ。あなたの体は他の人と違う。性行為をいくらしても壊れないどころか、すればするだけ増々磨かれる。フェロモンもどんどん出てくるし、周りを狂わせる……あなたの精液のサンプルが欲しいので、ぜひ取らせて下さい♡」

「はあ！？」

「もちろん精液を取った後は、あなたをめちゃくちゃに犯します♡」

先生は俺の尻の穴に指をグリグリ挿れてきた。人差し指で中をいじられると、さっき散々クラスメイ

「効いてきたみたいですね♡」

「先生♡お尻…かゆい…♡」

「そうですか。じゃあお注射しましょうね♡」

「えっ♡」

先生はズボンを脱ぐと、俺のお尻にチンコをあてがった。荒い息でこちらを見下ろすと、口角をあげた。

「いきますよ～♡」

ズププッグプッグププッ♡

「あううう～～♡」

「んん～♡中トロトロで熱いですよ♡エッチなケツマシコだぁ♡」